

学位論文要旨

文学教育における読書行為の研究

丹藤 博文

1.研究の背景および目的と方法

(1)研究の背景

①学術的観点

戦後の米ソの対立・植民地支配・朝鮮戦争といった政治的に不安定な時代に、またアメリカ合衆国直輸入の経験主義やプラグマティズムに対する疑問といった状況の中で、本格的な文学の教育への期待が高まっていった。この時代支配的な思想であったマルクス主義のリアリズム論・反映論をベースとし、「人間変革」・「社会変革」が企図されていた。戦後の民主主義を担う児童・生徒の育成が求められていた。文学による「人間変革」・「社会変革」を強力に推進したのが日本文学協会に集う若き文学研究者や教師たちであった。娯楽や教養のレベルにとどまるのではなく、人間を内面的に変革するという文学の機能が探究された。文学を読むことで感動する、感動を体験することによって世界や人間に対する認識を深めるという文学体験論が確立された。このことを【第一段階】とするなら、【第一段階】は、具体的・現実的な行動に移されることもある。このことを【第二段階】とすると、【第一段階】＝読書行為（感動体験・文学体験）から、【第二段階】＝行動へと展開することが文学教育とされたのである。荒木繁の、所謂「問題意識喚起の文学教育」は、この【第一段階・行為】から、【第二段階・行動】への展開を具体化した実践として高く評価された。読書行為の成立をもってして、ただちに行動への転化が果たされるものではないが、益田勝実の現実認識・変革、大河原忠蔵の状況認識の文学教育は、【第一段階・行為】ではなく【第二段階・行動】を志向していた。

しかし、マルクス主義の後退、社会主義国への幻滅といった世界的な潮流の中で、日本文学協会が推進する文学の機能としての「人間変革」「社会変革」に対する疑問や批判も出されるようになった。文学教育を推進する内部からは、「人間変革」と言われても授業で具体化することの困難さが言われ、問題意識喚起・状況認識といった文学の機能への疑問も出されるようになる。文学教育に批判的な外部からは、1970年代に自民党による児童文学攻撃があり、1980年代には感動は教育できないとして読み方の技術を教えようとする読解主義が主張されるようになる。「文学教育」は特定の思想教育として非難され、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への要である「感動」体験そのものが公然と批判されるようになる。1980年代以降学級崩壊、いじめ、不登校といった教育問題が噴出する中で、「人間変革」よりも「読解主義」へと時代は流れ、文学教育も対応を余儀なくされていった。【第二段階・行動】よりも【第一段階・行為】へと文学教育の比重はシフトしていったのである。一方で、【第二段階・行動】を尊重しつつも、【第一段階・行為】の重視を求める立場もあった。太田正夫は、1960年代から教室の読者たちの読みの多様性に意味を見出そうとしていたし、田近洵一は児童・生徒の読みの成立のための読書行為論の理論化を試みていた。1980年代以降、世界的に活況を呈し、日本にも輸入された記号論・構造主義・受容理論・読者反応批評といった言語・文学理論は、読みに正解があるとする正解到達主義もしくは客観主義を否定した。長く国語教育における読み方指導の理論的支柱であった解釈学は根拠を持ち得なくなった。読者による読みの創造性や多様性は自明なものとなった。

国語教育の現場では、今も百年も前の解釈学的図式を出ていない。最大の問題は、言語の教育でありながら言語論的転回に応じていない点にある。したがって、文学教育に、い

ま、求められることは、戦後文学教育の到達点であり、児童・生徒をふまえた文学体験論・読書行為論を言語論的転回の立場から再構築する、あるいは批判的に乗り越えるということであろう。読む対象としてのテキストとは実在する実体ではなく、インクのシミにすぎない。読むとは、読者による一回限りの現象でしかないという言語論的転回以降の地平から、読者の内的な感動体験の生成と読みの深まりに目を向け、そのための方法を構築することが必要である。読者の内的な反応や感動を問題とし深めることなしには読解力も身に付かない。内面を問題としない読解主義では読解力は養えないというのが本研究の立場である。文学教育が軽視した〈方法〉、読解主義が遠ざけた内的な〈感動〉が交差する場に教室の読みの可能性を見い出したい。

②状況論的観点

2019年12月に公表された国際学習到達度(PISA)調査において、日本の児童・生徒の読解能力の低下が指摘された。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年実施している学校読書調査(2019年11月1日)によれば、1カ月に1冊も本を読まない「不読者」の割合は、小学生6.8%、中学生12.5%、高校生55.3%であり、学齢が上がるにしたがって本を読まなくなるという実態が明らかになっている。また、内閣府の調査は、小・中学生で半数以上、高校生のほぼ全員がスマートフォンを所持し、1日の利用時間は1人平均2〜3時間、多ければ5〜6時間にもなると報告している。一方、文部科学省はデジタル教材を教科書として認める通達を出し、学校へのスマートフォンの持ち込みを禁止するとの措置を解除した。さらに学校におけるICT化をいっそう推進するとの方向性を打ち出しており、2021年度から児童・生徒には端末が貸与されることになっている。児童・生徒の日常生活のみならず学校における言語生活においても、ICT化は当然のこととされ推進されようとしているのである。しかし、デジタル教科書への批判やICT化への懸念も表明されていることを見逃してはならないだろう。直接的な対面による会話や手書きでの作文に比して、スマートフォンやパソコンによるコミュニケーションや文章作成においては脳の前頭前野の機能低下が認められるとのデータもある。ICT化の波と電子器機の急速な普及、それによる言語生活の変化は、はたして児童・生徒のリテラシーの発達に影響を与えないと言い切れるものかどうか。言語と思考は不可分であることから、言語力や読解力の衰退は思考力の低下につながることは疑いを容れない。情報化社会・メディア時代と言われる今日においてこそ、言語力・読解力・思考力を養うことは学校教育における喫緊の課題である。

(2) 研究の目的

戦後文学教育における読書行為論を、言語論的転回・文学理論により批判的に検討することで、新たな読書行為論を構築する。また、教室における読書行為成立のための読みの方法を提案する。

(3) 研究の方法

①第Ⅰ部・先行研究。文学の機能を探究した文学教育論の系譜をたどることによって、読書行為にとって明らかになった課題とは何かについて述べる。

②第Ⅱ部・理論研究。読書と行為との関わりを原理的・理論的に明らかにする。言語論的転回以後の言語論・文学理論の観点から、田近洵一(言語行動主体の形成)の読書行為論を取り上げ批判的に検討する。

③第Ⅲ部・教材研究。読書行為成立のための方法としてナラティブ・メソッドを提案し、

教科書教材を例にしながらテキストの行為を可視化するための分析方法について具体的に検討する。

2.研究の特色および成果

①児童・生徒の内面的な感動を喚起する読みの方法の必要性

戦後の文学教育の理論的な背景はマルクス主義であり、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への可能性を最大化しようとするものである。しかし、世界的にマルクス主義への疑問が出され構造主義への移行がなされていくと、【第一段階・行為】から【第二段階・行動】への可能性は最小化されるようになる。読みの技術を教えることを専らとする読解主義の提唱である。しかし、この読解主義は児童・生徒の内面的な感動を捨象してしまう。一方、文学教育は読みの技術および方法を軽視する傾向にあった。読者の知情意といった内面的な感動を無視したところには体験としての読書行為は成立せず、読解力も養われるものではない。そして、読書行為の成立といった目的のためには方法が不可欠であることは言うまでもない。したがって、読者の内面的な感動を喚起する読みの方法論を構築することが読書行為の成立を促し、児童・生徒の言語力・読解力の育成に有効である。歴史的な経緯をふまえつつ、本研究が明らかにし強調するところのものである。

②言語論的転回による読書行為論の再構築

次に本研究のオリジナリティは、読書行為論を言語論的転回の視点から再構築するところにある。戦後の文学教育は、文学理論とは異なり、読者を読みのメカニズムの要素としてとりあげた点に特徴がある。文学体験論の成立である。しかし、マルクス主義の反映論をベースとした文学論では、読みは客観的なものであり読者の読みと作品上の読みというように二元論的に分けられる。したがって、読者の読みそれ自体に意味は見い出されず、「客観的読み」「正しい形象」に近づくものでなければならぬとされるのである。文学教育においては、【第一段階・行為】よりも【第二段階・行動】が強調されることがあるのはこのためである。しかし、言語論的転回による構造主義やテキスト論によれば、読みとは「還元不可能な複数性」(ロラン・バルト)を特徴とする。言語実体論に依拠した二元論的読みは、教室の読者の読みの多様性や創造性とは矛盾することになる。読みとはテキストに戻ることはなく、読者の内面に生成される一回性の現象でしかない。言語実体論による二元論的な読みの理論は破棄されなければならないのであり、読者の内面に生成される一回性の読みを深める以外に【第二段階・行為】にいたる道はない。これが本研究の結論である。言語論的転回の地平から戦後文学教育の産物である文学体験論もしくは読書行為論を批判的に再構築したことに学術的な意味があると考えている。

③テキストの行為を可視化するための方法(ナラティブ・メソッド)の提案と教材分析例

文学テキストの行為を可視化するための方法論を提案した。言語も文学も理論上行為遂行的であることが明らかになった。言語はその使用や効果によって言語である。それゆえ、文学教育においてはテキストの行為を可視化することが文学を文学として読むということになる。読解のための分析ではなく、読者による感動を深め読書行為を成立させるものでなければならない。テキストの行為を可視化する読みの方法として〈ナラティブ・メソッド〉パフォーマンスを提案し、具体的な教科書教材の行為を明らかにした。文学教材の行為遂行性を追究し読みとして具体化することは本研究の特色であり授業実践上有効である。